

# ユタ戦争

年表	
年代	重要な出来事
1857.7.24	ブリガム・ヤングと聖徒たちに、連邦政府軍によるユタ遠征の報が届く
1857.9.7	スチュアート・バン・ブリート大尉が軍の補給物資調達のためにソルトレーク・シティに到着する
1857.9.11	シダー・シティの近くでマウンテンメドーの虐殺が起こる
1857.9.15	ブリガム・ヤング知事がユタ準州に戒厳令を敷く
1857.10	ロト・スミスとその一隊が連邦政府軍の補給物資輸送隊を急襲する
1857 1858冬	ジョンストン指揮下の政府軍がキャンブスコットで越冬する
1858.2 4	トーマス・L・ケイン大佐を介して行われた教会指導者とアルフレッド・カミング知事の調停交渉が成功する
1858.3 5	ユタ北部の入植者たちが南部へ移動する
1858.6	講和委員会が教会に特赦を与える
1858.6.26	ジョンストン指揮下の政府軍がソルトレーク・シティを通過する

アメリカ国民として忠誠を尽くしていると自負していた末日聖徒は、「モルモンの反乱」を鎮圧するために大規模な連邦政府軍が西進しているという知らせを聞いて憤然とした。以前の迫害の時代を思い出し、また自分たちの入植地を追い出されることになるのではないかと危惧した。その後の数か月間、聖徒たちは自衛の準備をした。教会の指導者も会員も、二度と弾圧を受けたいとは思わなかった。

教会と連邦政府の摩擦の中心にある問題は、聖徒たちが行っていた多妻婚と、教会によるユタ準州の司政権の掌握という二つの事柄であった。1856年にユタ準州が州昇格の申請を行ったときに、それに対して激しい反対が起こり、「モルモン問題」が国政レベルにまで発展した。

1854年に奴隷制度撤廃を強く唱える共和党が結成され、1856年には最初の大統領候補を押し立てた。共和党はその綱領の中で、準州で行われている二つの「悪習」すなわち多妻婚と奴隷制度を禁止するよう議会に強く働きかけていた。奴隷制度の支持が多妻婚への支持と受け取られることを嫌った民主党は、共和党と同じようにモルモンを激しく非難した。民主党候補のジェームズ・ブキャナンは選挙運動期間中に、自分が当選した場合には、ブリガム・ヤングを準州知事の職から降ろすと公約していた。

それと同じころにユタでは、末日聖徒たちの生き方を変えることを己の使命と考え、住民たちに不快感を与えていた準州官吏と聖徒たちの間に新たな問題が生じていた。公有地監督官、3名のインディアン管理官、2名の最高裁判事、前合衆国郵便事業請負業者たちからの書面と口頭による報告がワシントンに届き、教会に対する東部の政治家たちの印象をさらに悪化させた。最悪の結果をもたらしたのは、1854年にユタへ到着するとすぐに聖徒たちと対立した陪席判事ウィリアム・W・ドラモンドであった。彼はユタ準州民が敵に対する最も重要な法的自衛手段と考えていた検認裁判所の管轄権を激しく攻撃したのである。彼はまた破廉恥な人間であり、ワシントンから一人の娼婦を愛人としてユタへ連れて来ていたのである。彼は聖徒たちに道徳心が欠如していると仰々しい説教をするときにも、その愛人を自分の隣に座らせておくようなことさえしていた。後になって、彼が東部で妻子を遺棄していたことが分かった。

モルモンに改宗したユダヤ人リーバイ・アブラハムから自分の人格について真実を突いた批評をされたとき、ドラモンド判事はアブラハムを馬の鞭で打ちすえさせようとして、フィルモアの彼の家に自分の従者を送った。

ドラモンドとその従者は後に暴行と殺人未遂の容疑で逮捕された。保釈されるとドラモンドはそそくさとカリフォルニアへ逃げ、さらにそこからニューオーリンズ

## ユタ戦争

へ行った。そして彼はそこでブキャナン内閣に書き送った辞表を公開したのである。そして、モルモンは準州最高裁の文書類を破棄し、その指導者たちは連邦政府の官吏を侮辱している、またユタではブリガム・ヤングの作った法以外に法律というものを知らない秘密の誓約による結社が横行している、1854年のジョン・W・ガニソンの測量隊の虐殺はインディアンではなくモルモンの仕業であり、ユタには国家への反乱の意志があるなどと強く主張した。

不幸なことにドラモンドの非難は真実と思われ、ブキャナン内閣の教会に対するおおかたのイメージを決定したのである。ドラモンドの手紙を受け取って間もなく、ブキャナン大統領はユタの実情調査もヤング知事への意志伝達もせずに、ジョージア州のアルフレッド・カミングをユタ準州知事に任命し、陸軍に2,500人の兵をもってカミング知事をソルトレーク・シティーまで護送するようにと指示した。1857年5月18日のこの軍令を発した戦争担当長官ジョン・B・フロイドは反モルモンの急先鋒<sup>せんぽう</sup>であり、彼は軍隊による実力行使の必要性を強く主張していた。国務長官ルイス・カスはカミングに、モルモンの生活習慣に対する干渉はせずに、法を遵守するようにとの訓令を与えた。

1857年の夏には、共和と民主両党の多くの政治家がモルモン反対論を主張し、十分な根拠も示さないまま、間違いがあると批判した。上院議員スティーブン・A・ダグラスもその一人であった。彼はそのころ、自分の選挙区のイリノイ州における政治基盤の立て直しを図っていた。イリノイ州には激しい反モルモンの気運がまだ残っていた。以前聖徒たちはダグラスを誠実な友と考えていたので、彼の非難の言葉には特に腹立たしいものを感じた。そして、聖徒たちは1843年にジョセフ・スミスがダグラスに語った預言を思い出し、それを『デゼレトニュース』(Deseret News)に発表した。預言者は、ダグラスはいつか合衆国大統領の職を望むようになるが、もし末日聖徒に対して手を上げるようなことがあれば、「全能者の御手の重さを感じる」であろうと宣言していたのである。<sup>1</sup> 1860年にダグラスは民主党の大統領候補となったが、結局は、共和党のエブラハム・リンカーンに敗北した。

## 教会の対応

1857年7月1日、ブリガム・ヤングが経営する郵便物配達とポニーエクスプレスをを行うY.X.会社の職員が、郵便物を受け取るためにミズーリ州インディペンデンスにある連邦政府郵便局に立ち寄った。そこへ来る途中、彼らは物資を積んだ輸送隊が陸路を西へ進むのを見て、非常に興味を引かれていた。インディペンデンスで彼らは、連邦政府がY.X.会社との配達請負契約を解消し、それと同時に大編成の陸軍部隊をユタへ派遣したことを知らされた。彼らが見た輸送隊は陸軍の物資を運ぶためのものだったのである。ソルトレーク・シティー市長であり、この末日聖徒の一行の指導者であったアブラハム・O・スムートはこの報を携えて、同僚のポーター・ロックウェルとジャドソン・ストッダードとともに、力の限りを尽くしてソルトレーク・シティーへ急行し、7月23日に到着した。翌7月24日彼らは、ビッグ・コットンウッド・キャニオンでグレートベースン到着10周年祝賀行事をしていたブリガム・ヤングと多くの聖徒たちのもとへ駆けつけた。祝賀気分には水を差したくないと考えたブリガム・ヤングは、連邦政府の動きを発表するのを夕暮れまで待った。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

アルフレッド・カミング(1802 - 1873年)は1858年から1861年にかけて、ユタ準州知事の職を務めた。それ以前には、1836年にジョージア州のオーガスタ市長を務めた経歴がある。

## 時満ちる時代の教会歴史

この「侵略」にどう対応すべきかを検討した教会指導者は8月の初めに一斉にユタ住民に一つの宣言を発表した。

「我々は敵の軍隊の侵略を受けている。彼らの攻撃の目的が、我々を倒し、滅ぼすことにあるのは明らかである。……

……軍隊が攻撃するような場合、調査委員会を設置したり、事実関係の確認のために人を派遣したりするのが常であるが、連邦政府にはそのようなことをするつもりはない。……

この強いられた状況の中で、我々は国法の本質とこの国が存立する基盤となるものに保証されている正当防衛の権利により、自衛という第一原則に訴えざるを得ない。

自身と家族を守る責任は、自衛の努力をせずになされるがままに服従し、追い出され、根絶やしにされるというようなことを求めはしない。国家、神聖な宗教、神、自由に対する義務は、何もせずに手をこまねいているように求めるものではない。」<sup>2</sup>

この宣言には以下の3つの意図が明示されている。いかなる理由でもユタ準州への軍隊の侵攻を許さない。ユタのすべての戦力をもって、いかなる侵攻に対してもそれを撃退する備えをさせる。準州に戒厳令を敷く。<sup>3</sup>

そしてブリガム・ヤングは、準州軍を召集するとともに、準州内を通過する移住者や投機家に穀物やその他の重要物資を販売しないように命令した。さらにとりでの建設を命じ、政府軍部隊と補給物資輸送隊を攻撃するための遊撃隊を組織した。彼はまた、聖徒たちが入植地を放棄しなければならない事態に備えて、別に適切な入植地を見つけるために、ホワイトマウンテン遠征隊の名で知られる一団を派遣した。遠隔地にいる宣教師や入植者たちも、防衛力強化のために召還された。平原を横断していた移住者たちは安全にソルトレーク盆地に導き入れられ、次の年の移住計画はすべて中止とされた。

ヤング知事はサミュエル・W・リチャーズに親書を持たせてブキャナン大統領のもとへ派遣し、講和委員会によって納得のいく処置が取られるまで、政府軍はユタ準州へ入ることはできないと伝えた。またリチャーズ長老は、聖徒たちの長年の友トーマス・L・ケインにあてた、教会のために仲介の労を要請する手紙を携えていた。リチャーズはまたニューヨークへ行き、『ニューヨークタイムズ』(New York Times)のインタビューを受け、「偏見のない」、聖徒の立場に立った内容が紙上に発表された。<sup>4</sup>

9月7日に、補給部隊のスチュアート・バン・ブリー大尉が、後続が予定されていた軍の食糧と馬糧を調達するために、ソルトレーク・シティに到着した。彼は教会指導者に、軍の西進は平和的な目的によるものであるということを説得しようとした。バン・ブリーは、一連の問題が生じて以来、軍人あるいは官僚の中で聖徒が初めての接触を持った人物であった。丁重に遇されたバン・ブリーは教会指導者と会談し、モルモンの抵抗規模を調べ、また旧タバナクルの集会に出席してミズーリ州とイリノイ州で受けた数々の迫害に関する話を聞いた。話し手たちは、聖徒たちは政府軍がソルトレーク盆地に入る前に、自分たちの家や収穫物を燃やし、政府軍を間断なく攻撃して悩ませると力を込めて語った。聖徒たちは全員一致で、ブリガム・ヤングが唱えた抵抗運動を支持することを誓約した。

バン・ブリーは、モルモンは合衆国政府の権威に反意を持っているのではなく、

## ユタ戦争

不当な軍隊の侵略に対する自衛は当然と考えていることを確信するようになった。物資の調達をすることができなかった彼は軍に帰り、さらにワシントンへ赴いて、和平調停を行うよう強く主張した。バン・ブリートには、トーマス・L・ケインへの手紙を託されたユタ準州選出下院議員ジョン・M・バーンハイゼルが随行した。

その一方でプリガム・ヤングは、計画を着々と推し進めた。1857年の9月中旬ごろ、彼は準州内に戒厳令を敷き、軍隊の侵入を禁じた。彼はノーブー隊に政府軍の侵攻に備えるように命じた。ユタ準州内のほとんどすべての入植地において自衛の準備が加速して進められた。彼はまた村々の監督に対して、万一戦いが起きたときにはすべてのものを焼却する準備をしておくように命じた。

## マウンテンメドローの虐殺

バン・ブリート大尉がソルトレーク・シティーに着いたと同じ週に、南へ約300マイル（約480キロ）離れた所で悲劇的な出来事があった。その事件は、連邦政府軍の接近によって引き起こされた、戦争に興奮した精神状態を考慮すればよく理解できるかもしれない。軍隊が近づいていると知るとすぐに、南部の入植地に対して責任を持っていたジョージ・A・スミスはユタ南部へ行き、兵員となる聖徒たちを動員し、その地域に戦争への警戒体制を取らせた。

ちょうど同じころ、アーカンサス州出身の数家族と「ミズーリの荒くれ者」を自称する一団のカウボーイから成るファンチャー隊がユタ中部を通過していた。彼らは寒い季節が近づいていたために、南のルートを通してカリフォルニアへ向かっていた。ユタ準州には戒厳令が敷かれていたために、このファンチャー隊の一行は穀物や補給物資を購入することができなかった。しかし、彼らの中には地元の農民の持ち物を盗む者がいた。そのうえ、ハウズミルの虐殺やジョセフ・スミスの暗殺、モルモンに対する暴行などを得意そうに話す者までいたのである。何人かの地元の入植者は、ファンチャー隊のアーカンサス出身者の中にアーカンサス州で起きたパーリー・P・プラット暗殺事件に関与した者がいると考えた。また、ファンチャー隊は連邦政府軍の偵察隊だと考えた聖徒たちもいた。

ユタ南部におけるインディアン問題はこれらの状況をさらに複雑にした。聖徒たちはインディアンとの間に友好的な関係を築こうと努力を続けていたが、なお危険な状況であった。インディアンたちは「メリキャッツ」と「モルモニー」をはっきりと区別していた。「メリキャッツ」はユタを通過するアメリカ人全般であり、インディアンたちは彼らをまったく信頼していなかった。「モルモニー」は聖徒たちを指す言葉で、インディアンは一般的に彼らに対して好意的であった。しかし、インディアンがモルモンの入植者を攻撃する可能性も依然として存在していた。

1857年9月7日火曜日、インディアンの一隊がシダー・シティーから35マイル（約56キロ）離れた所で宿営していたファンチャー隊を攻撃した。ファンチャー隊はよく武装していたために、インディアンたちは退却を余儀なくされた。

一方、シダー・シティーの住民たちはファンチャー隊に関してどのように対処すべきかを話し合った。短気な者たちの中には、ファンチャー隊は壊滅されて当然と主張する者もいた。しかしシダー・シティーの住民たちは、ファンチャー隊がカリフォルニア駐屯軍と手を組んで聖徒に戦いを仕掛けてくることを恐れていた。事実



ジョージ・A・スミス(1817 - 1875年)はシオンの陣営に参加した経歴を持ち、宣教師、使徒、副管長、教会歴史記録者、ユタ州議会議員などを務めた。預言者ジョセフ・スミスのいとこである。





ジェームズ・ホルト・ハズラム（1825 - 1913年）はイギリスのボルトンで生まれた。1851年にユタへ到着し、シダー・シティーに入植した。後にユタ北部のウェールズビルに移り、そこで残る生涯を過ごした。

ファンチャー隊はそうにすると公然と威嚇していたのである。ブリガム・ヤングの助言を求めるために、ジェームズ・ハズラムが急使として派遣されることになった。ハズラムはほとんど不眠不休で、わずか3日でソルトレーク・シティーに到着し、ファンチャー隊を無事に通過させるように聖徒たちを促す手紙をヤング大管長から受け取った。ソルトレーク・シティーを出立するハズラムに、ブリガム・ヤングは強い調子で語った。「馬を休ませず全速力で行きなさい。たとえアイアン郡に住むすべての聖徒の協力を得ても絶対にその移民たちに手出しをしてはならない。何の妨害もなく、自由に行かせなければならない。」<sup>5</sup> ハズラムはシダー・シティーへ急ぎ9月13日の日曜日に着いたが、2日遅れの到着であった。

インディアン管理官ジェイコブ・ハンブリンの不在中、ブリガム・ヤングによってインディアンに農業を教える責任を与えられていたジョン・D・リーがインディアンたちを静めるために送られていた。彼はインディアンと移住者たちの間で最初の衝突が起こった直後にインディアンのキャンプに到着した。インディアンたちはひどく興奮していて、白人であるリーがそこに一人にいること自体が危険な状況であった。彼は最終的にインディアンたちに、報復を受けることになるを理解させ、その後そこから立ち去ることを許された。

その夜遅く、さらに多くのインディアンがシダー・シティーからの数人の白人とともに、そのキャンプにやって来た。その夜、怒り狂うインディアンたちをなだめるという目的の下に恐ろしい計画が仕組まれた。翌9月11日の朝、その計画に加わった白人たちは、武器を捨てることを条件にファンチャー隊を保護すると約束をした。しかし、地元の指揮官の命令によって行動するアイアン郡民兵が移住者の中の男たちを殺し、インディアンたちが女と年長の子供たちを殺害したのである。全部で約120名の犠牲者だった。殺されなかったのは、18名のほんとうに幼い子供たちだけであった。後にその子供たちは政府の援助によって、東部の血縁者のもとへ連れ戻された。

殺された者たちの遺体は浅く掘った土中に埋められた。そして虐殺はすべてインディアンの行ったことにするという誓いがなされた。この悲劇的な事件から2週間以上たってから、ブリガム・ヤングに報告するためジョン・D・リーがソルトレーク・シティーに派遣された。リーは事前に話し合っていたとおり、すべてインディアンがなしたことであると報告した。後にブリガム・ヤングはアイアン郡民兵隊員が直接関与していることを知った。彼はアルフレッド・カミング知事に、捜査に対して全面的協力を申し出ていたが、結局は何の措置も取られなかった。ユタ戦争に関連して申し立てられた犯罪行為のすべてについて、モルモンに特赦令が出ていたからである。

その後の20年間、様々なうわさや申し立てがあったが、1870年代になってついにこの事件は法廷で裁かれることになった。ジョン・D・リーは重要人物の一人であったが、この事件に対して責任を負うべき士官は彼だけではなかった。にもかかわらず、起訴された末日聖徒は彼だけであった。リーは2度裁判にかけられた。一審では不一致陪審となったが、1876年の9月に有罪となり、その1年後に連邦政府の役員によってマウンテンメドーの地域へ連行され、そこで死刑が執行された。

## ユタ戦争

### 戦争の回避

マウンテンメドローの虐殺が行われたころ、連邦政府軍は現在のワイオミング州にあるサウスパスと呼ばれる地域に接近していた。政府軍の指揮は暫定的にエドモンド・B・アレクサンダー中佐が執っていた。二人のユタの民兵がカリフォルニアへの移民と称して、政府軍の中に入り込んでいた。この二人は政府軍の中の反モルモン分子の不穏な動きを直接察知した。それは政府軍の正規の指揮系統によるものではなかったが、ユタの教会指導者たちはそれを聞いて、武力衝突もあり得ると神経をとがらせた。モルモンの偵察隊は政府軍の動きのすべてを監視していた。

9月にヤング知事が戒厳令を敷いたのに続いて、ノーブー隊のダニエル・H・ウエルズ将軍は東のエコーキャニオンに約1,100人の兵を派遣した。エコーキャニオンは山岳地帯を抜けてソルトレーク・シティに入るルートの途上にあった。この兵士たちは狙撃用の土手を作ったり、塹壕<sup>さんこう</sup>を掘ったりした。また大きな石を移動して、進んで来る敵軍の頭上にすぐに落とせるように仕組んだり、水路やせきを造って、敵の進路に激流が押し寄せるようにしたりといった備えをした。

接近中の政府軍を間断なく攻撃して疲労させるために、ノーブー隊の一部隊である44名編成の「モルモン電撃隊」がロト・スミス少佐の指揮の下、東部ユタ（現在のワイオミング州西部）に派遣された。彼らが特に指示されたのは、「政府軍各隊の現在地や進路を確かめ、考えられるあらゆる方法で彼らを悩ませることであった。あらゆる手段を使い、政府軍の馬や牛の群れを驚かせて逃げ出させたり、幌馬車に火を放ったりすること、また政府軍の進路や側面に当たる地域の畑を焼き払い、夜には奇襲をかけて寝不足の状態にさせた。……政府軍兵士の命は取らなかったが、あらゆる機会をとらえて、彼らの幌馬車を破壊し、馬や牛を逃げ出させた。」<sup>6</sup>

10月4日の夜、スミス少佐と20人の兵士が、政府軍補給物資輸送の先導をする幌馬車に迫った。その御者たちは、スミス少佐が多数の兵士を率いていると思い込み、撤退を迫られると、一言もなくそれに従わざるを得ない状況だと考えた。ジェームズ・テリーは日記に次のように書いている。「あれほどおびえた人たちを見たことはかつてない。彼らは自分たちに危害が加えられないと知るまでひどくおびえていた。彼らは笑い、そして、幌馬車が燃やされれば、自分たちは馬や牛に鞭を入れる必要がなくなり、うれしく思うと話した。御者たちは馬車の中から銘々の衣類と銃を持ち出すことは許されたが、その後で幌馬車は燃やされた。」<sup>7</sup>

翌朝、ロト・スミスとその一隊は政府軍の補充物資を積んでソルトレーク盆地へ向かう別の輸送隊を見つけた。ロトはその隊の御者たちの武装を解除してから、馬を駆り、家畜を守っていた指揮官に出会うと、銃を渡すように要求した。その指揮官はロトに答えて言った。「『今までだれもそんなことをした者はいない。わたしを殺さずにそうできると思うなら、やってみるがいい。』わたしたちはその間中ずっと、輸送隊に向かって鼻を並べた2匹のスコッチテリアのようにして並んで馬を走らせていた。彼は目をぎらつかせていた。わたしはどうだろう。わたしは彼に『その勇敢さは立派だと思うが、血を流すことは好まない。君は殺すなら殺せと言っているが、そんなことはすぐにでもできる。しかし、そうはしたくないんだ』と言った。そのときわたしたちは輸送隊に追いついた。彼は自分の部下たちが監視下に置かれ降伏しているのを見てこう言った。『分かった。わたしの方が不利な立場にある。部下た



ロト・スミス（1830 - 1892年）は16歳のときに、モルモン大隊の一員として従軍した。1869年にはイギリスへの伝道に召された。後にリトルコロラドステークの会長として10年間、その務めを果たした。

ちも武器を引き渡している。』わたしはそれに対して、『わたしは優位に立つ必要はない』と答え、彼らに武器を戻したらどうするつもりかと尋ねた。彼が『おまえたちと戦う』と答えたので『そうか、わたしたちも戦い方を少しは知っている。それなら、武器を取れ』と言った。すると彼の部下たちが叫んだ。『おれたちはお断りだ。おれたちがここへ来たのは、荷物を運ぶためだ。戦争するためじゃない。』『シンブソン、彼らの言い分を聞いて、何か言うことがあるか』と聞くと、彼はこれ以上いまいましいことはないという表情で、歯ぎしりをしながら『ちくしょう！』と答えた。『こうなる前にわたしがいて、それでもあいつらが戦うのを拒んでいたら、全員を殺していただろう。』<sup>8</sup>

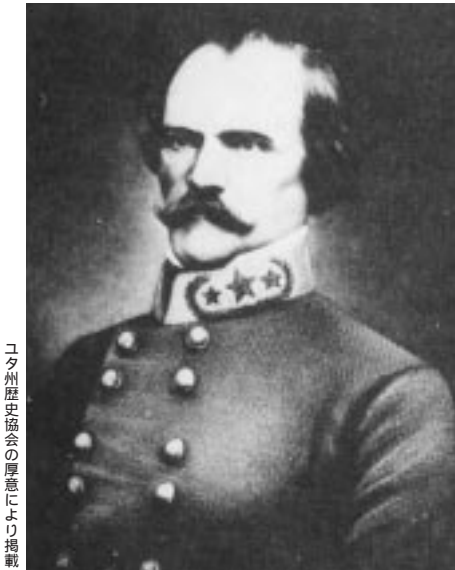
これと、この後の何度かの政府軍との交戦の中で、ロト・スミスの電撃隊は、全部で74両の幌馬車を焼き払い、大隊の3か月分の物資を獲得したのである。また彼らは政府軍の2,000頭の牛馬のうち1,400頭を捕獲した。スミス少佐の率いる民兵はモルモンの二つの重要前哨地点フォートブリッジャーとフォートサブライの焼き払いに参加した。政府軍はこの二つのとりでの占領をねらっていたのである。

このような戦術が功を奏して政府軍の行軍は大幅に遅れ、司令官のアルバート・シドニー・ジョンストン大佐（間もなく将軍になった）が11月初旬に着任した時点では、ソルトレーク・シティーに進むには時期があまりにも遅れてしまっていた。政府軍は嵐と酷寒の中、焼き払われたフォートブリッジャーまでの35マイル（約56キロ）を進むのに15日も要した。約2,500名の政府軍兵士と数百名の文官（カミング知事夫妻を含む）、物資輸送請負人、随行者たちは、ワイオミング西部のテントと間に合わせの小屋から成るキャンパスコットという宿营地と、「準州の新任裁判所長にちなんで『エックルスビル』」と名付けられた急ごしらえの集落で惨めな越冬生活を強いられた。<sup>9</sup> そのころ東部では、政府軍のユタ遠征問題に関する新聞の論調に変化が生じ、ワシントンのジェームズ・ブキャナン大統領とユタのプリガム・ヤングはそれぞれに、1858年に向けて取るべき道を慎重に探った。

### 講和の樹立

冬に入って間もなく、3人の有力者 スチュアート・バン・ブリート大尉、ユタ準州選出下院議員ジョン・M・バーンハイゼル、トーマス・L・ケイン大佐 がワシントンのブキャナン大統領を訪ね、ユタに調査委員会を派遣するように力説した。調査委員会の派遣を望まなかったブキャナン大統領は、平和的解決を達成するためにケインを非公式にソルトレーク・シティーへ派遣することに同意した。1858年1月、ケインは自費でニューヨークを蒸気船に乗って出発し、海路パナマ経由でカリフォルニアへ向かった。彼は自分の動きが人目につくことのないように、ドクター・オズボーンという偽名で旅をした。

ケイン大佐は2月25日にソルトレーク・シティーに到着し、心からの歓迎を受けた。彼はしばらくの間、教会を指導する役員以外には自分の素性を明かさなかった。<sup>10</sup> 年前ウィンタークォーターズで経験したと同じように、聖徒たちが1858年のそのときにも見知らぬ人に対して好意的かどうかを確かめるためであった。プリガム・ヤングとほかの教会指導者たちは、ケイン大佐は神から遣わされたのだと確信した。教会の指導者たちと何度か話し合いを重ねた後に、ケインは彼らに対して、新しい知



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

アルバート・シドニー・ジョンストン（1803 - 1862年）はケンタッキー州出身であった。1826年にウェストポイントの陸軍士官学校を卒業。ブラックホーク戦争に従軍、またテキサス共和国軍と戦いを共にしている。南北戦争では南軍の将軍として従軍し、シャイロー（訳注：南北戦争の激戦地）の戦いで戦死した。



## ユタ戦争

事アルフレッド・カミングを一切妨害することなくユタ準州に入らせるよう説得した。しかし、ブリガム・ヤングはカミングと一緒に軍隊を入れるべきではないと強く主張した。

3月上旬、ケインは健康状態が優れなかったが、モルモンの民兵に護衛されて酷寒の中キャンパスコットへ向かった。キャンパスコットへ近づくと彼は護衛の兵士たちを解散させ、単騎で歩を進めた。

危うく歩哨たちの射撃が命中しそうになったが、彼は勇敢に自分の名を名乗り、激しい交渉を重ねた末にカミング知事と会見することに成功した。彼はカミングに、ユタ準州民が彼を新しい知事として迎え入れるであろうということ、また彼らは政府に対して反逆しているのではないということを理解させようと説得した。そして、モルモンは政府軍のソルトレーク盆地駐屯を認める意志がないということを説明した。

4月になって、ケイン大佐とカミング知事は政府軍の護衛を一人も伴わずにキャンパスコットを後にした。ソルトレーク・シティーに到着したカミングは、ケインの言ったとおりであることを知った。カミング知事は敬意をもって迎え入れられたのである。ブリガム・ヤングは準州の文書類と印を新任の知事に渡し、幾度かの会談の後に友好的な感情が両者の間に生じた。それからの3年間、カミングは如才なく、優れた手腕をもってその職責を果たし、人々の敬意と信頼を受けた。そしてトーマス・L・ケイン大佐も、両者の交渉の間に立って果たした役割のゆえに、末日聖徒の変わらぬ感謝を勝ち取った。

ケインとカミングがユタに到着する前に教会の指導者たちは「戦時評議会」で、その季節に政府軍が侵攻してきた場合、ユタ北部の聖徒たちは衝突を避けるために自分たちの入植地を引き払い南へ移動するという決定をしていた。ブリガム・ヤングは次のように誓った。「残忍な兵士たちによって妻や娘たちが乱暴を受けて汚されたり、息子たちの心の中に墮落の種がまかれたりするのを見るよりは、家を灰にして畑も果樹園も荒れ果てさせ、草木の根や葉を食べ、残りの人生をこの山々を漂泊して生きていった方がましである。」<sup>10</sup>

この「南への移動」のために教会は3つのグループに分けられ、各グループに特別な使命が与えられた。(1) ユタ南部の聖徒たちは動かない。ただし、移動を助けるために幌馬車、牛馬、御者をユタ北部へ送る。(2) ユタ北部に住む若くて強健な聖徒たちは、作物の世話をし、財産を守り、万が一の場合には、わらぶきの家々に火を放つために、入植地にとどまり続ける。そして、(3) ユタ盆地北部に住む約3万5,000人の聖徒たちは南へ移動する。各ワードは、ソルトレーク郡南部の4行政区の一つに土地を割り当てられた。まず物資を運び、その後に聖徒たちを移動させることにした。

移動は厳格な軍規に従って行われた。各ワードは10人、50人、100人の単位に組織され、各隊に指揮官がついた。聖徒たちは食糧や衣服のほかに家具なども運ぶように求められた。

ある10代の開拓者の少女はこう記録している。「すべてのものを父の幌馬車に積み込み、出発の命令を待った。夜には横になって眠りに就いたが、自分たちを滅ぼすために近づく軍隊についていつ知らせが入るかは分からなかった。……



## 時満ちる時代の教会歴史

……ある朝、父が夕方になったら大きな隊と一緒に出発すると言った。……

昼ごろに父は部屋の中に木の葉やわらを入れ、こう言った。『心配しないでもいいよ。この家は今日までわたしたちを守ってきてくれたけど、政府の軍隊をここで休ませるわけにはいかないんだ。』<sup>11</sup>

ユタ準州のセンタービルに住んでいた少女ハルダ・コーディーリア・サーストンはそのときの移動のつらさについて、次のように回想している。「1858年の春、モルモンの大移動のときに、わたしたちもその中にいました。わたしたちはスパニッシュフォークまで南下しました。スパニッシュフォークの川沿いの低地には家畜の良いえさ場があり、川にはたくさんの魚がいました。そのとき、ユタ盆地北部に住むすべての人が南へ移動しました。家具や農具を残したまま、どこに行くのか、将来どうなるのかも分からず、すべてを残して自分たちの家を後にしたのです。……

この大移動のときに人々が味わった苦しみと貧しさは絶対に忘れることができません。敷物で作ったズボンををはいている男の人たちもいました。その人たちの足にはぼろ切れや布袋が巻かれていました。女の人たちは一緒に服を縫ったり、モカシンを作ったりしました。女の人や子供たちの中にもはだしの人がたくさんいました。わたしたちの母が、近所の7人家族のある立派な姉妹から聞いた話によると、実際に身に着けているものを除けば、家族全員が所有するほかの衣類は全部まとめても1枚の大型ハンカチに包み込めるほどしかないということでした。彼女は日曜日に備えて土曜日の夜には早く子供たちを寝かせ、彼らの服の繕い、洗濯、アイロンがけをしました。実際人々は皆貧しい暮らしをしていました。そのうえ、クリケットの害のために収穫物がほとんど底を突いたような状態が何年か続いていました。」<sup>12</sup> 目的地に到着すると、それぞれの家族は幌馬車やテント、<sup>ごう</sup>壕、間に合わせの板張りの掘っ建て小屋などに住んだ。

教会の文書類や資産は公共事業部によって移転されたり、土中に埋められたりした。あるグループは、ソルトレーク神殿のために切り出されたすべての石を隠した。そして、その基礎工事部分を平らにならして土で覆い、耕した畑のように見せて建設が妨げられないようにした。別のグループは什分の一として納められた穀物のすべてをふた付きの大きな箱に詰め、2万ブッシェル（約70万リットル）をプロボに特別に建築した穀物倉庫まで運んだ。またほかにも幌馬車で、機械や器具などを急ごしらえの倉庫や格納庫まで運んだ。

南への移動は約2か月を要し、5月中旬に完了した。5月の最初の2週間は、1日平均600両の幌馬車がソルトレーク・シティーを通過した。推定3万人の聖徒たちがソルトレークと北部入植地の家を後にした。<sup>13</sup> カミング知事夫妻は教会員たちに、家を捨てて行かないようにと説得したが、聖徒たちは預言者に従う道を選んだ。この大規模な住民の移動は、国内外で教会への関心と呼んだ。『ロンドンタイムズ』（*London Times*）は次のように報じた。「伝えられるところによると、彼らは人跡未踏の荒れ野を500マイル（約800キロ）も進む旅を始めたという。」「『ニューヨークタイムズ』も次のように伝えた。「モルモンを武装保安隊によって排除すべき不法妨害として扱うのは賢明な策とは言えないのではないだろうか。」<sup>14</sup>

この移動は、罪のない人民が迫害されているという印象を与えて、合衆国政府は不利な立場に立たされた。そして、ブリガム・ヤングの指導力が人々の耳目を引き

## ユタ戦争

付けたのである。

幸いなことに、政府と教会側の交渉によって、政府軍の侵攻は中断となった。1858年の早い時点でブキャナン大統領は講和委員会のユタ派遣を決定した。6月初旬に講和委員のベン・マックローチとラザラス・W・パウエルがソルトレーク・シティーに到着した。二人は、政府に対する忠誠心が確認されれば、聖徒たちに対して特赦令が出されるという申し出を用意していた。教会の指導者たちはその申し出を聞いて憤然とした。政府に対して忠誠を尽くさなかったことなど、一度もなかったからである。しかし、何度かの交渉の末、その申し出の受け入れが決まった。教会指導者がその特赦令の受け入れを決めたのは、ノーブー隊が政府軍に対して行った様々な作戦行動を考慮したためであった。講和委員会と教会指導者の間で取り決めたことの中には、軍隊がソルトレーク・シティーに静穏裏に入ること、また連邦軍の駐屯地は、ソルトレーク・シティーまたプロボの両市から少なくとも40マイル（約64キロ）離れた所に置くことなどの項目があった。

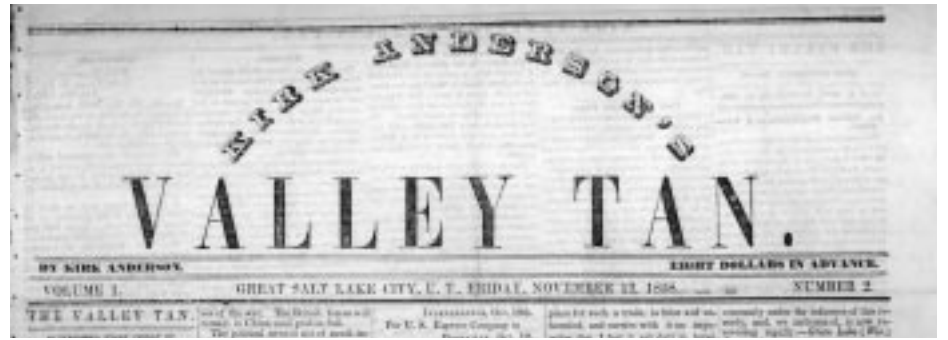
1858年6月26日、政府軍はほとんど人影がなく静まりかえったソルトレーク・シティーに入った。彼らは行進しながら「片目のライリー」という下品な歌を歌った。それは兵士たちの間では長く歌い続けられていた短い軍歌で、歌詞は1000節、その大半は印刷をはばかり猥褻な内容だと言われている。<sup>15</sup> 軍楽隊がカミング知事の新しい邸宅でセレナーデを演奏することになっていた。しかし楽隊の隊員たちは、カミング知事を末日聖徒に同情的な人間と見ていたために、演奏にあまり熱が入らなかった。ソルトレーク・シティーには、教会と聖徒たちの財産には手を出さないという取り決めを政府軍が破った場合に市内に火を放つ役割を受けたごくわずかの末日聖徒しかいなかった。フィリップ・セントジョージ・クック中佐は帽子を手に取り、それを胸に当てて、かつてのモルモン大隊の兵士たちに対して敬意を示した。クック中佐はモルモン大隊の指揮官として、彼らと長い行軍を共にした経験があったのである。その後の数日間、ジョンストン將軍は政府軍を率いてユタ湖の西のシダー・シティーに進み、そこに駐留地を開き、戦争担当長官の名にちなんでそこをキャンプフロイドと名付けた。7月1日に、ブリガム・ヤングは南へ移動した聖徒たちに、元の入植地に戻ることを命じた。

## 軍隊の駐留

政府軍の配備によって兵士と聖徒の間には緊張が生じたが、幸いにしてそれが深刻な対立として長期化することはなかった。これはジョンストン將軍の統制によるところが大きかった。將軍は聖徒たちに対して特に好意的ということはなかったが、政府軍の規律を維持する必要性をよく理解していた。

ユタにおける軍隊の悪影響は、準州内に様々な悪習を運んで来たことであった。ソルトレーク・シティーの街頭や近郊の町では、賭博師や輸送業者、駐留地に入りする関係者などが、頻繁に暴力ざたを起こした。そして、ユタにも酒場や売春宿などが建てられたのである。ソルトレーク・シティーのメインストリートは一時「ウイスキーストリート」と呼ばれたほどだった。それまで主流を成していた社会構造に傷がつけられたのである。1858年11月には激しい反モルモンの論調の新聞『バリータン』(Valley Tan)が創刊し、16か月間発行を続けた。この新聞はユタ準州民

『バリータン』表題紙



を殺人者，国家への反逆者として非難し，おもにキャンプフロイド内で配布されていた。こうして，いわゆる「文明社会」からの隔絶は終わりを告げたのである。軍隊の存在は，聖徒たちの中に流入して来る異邦人の増加を象徴するものであった。

政府軍とともに合衆国の3名の新任判事がユタへ到着した。この3人はそろって，末日聖徒の生活習慣を根本から覆えそうと考えていた。その一人ジョン・クレイドル判事はジョンストン將軍の同意を得て，自分の裁判の仕事を無言のうちに支援する圧力とするために，1,000名の兵士をプロボへ移させた。これは地元の人々を激高させ，簡単に大きな対立にエスカレートしかねない状況となった。

カミング知事やほかの関係者の努力のかいあって，ワシントンのブキャナン内閣が，プロボにいる隊はキャンプフロイドへ戻るようにとの命令を出し，危機的状況は回避された。

しかし政府軍のユタ駐留は，聖徒たちに思いがけない経済効果をもたらした。1855年にジョン・カーソンが入植し，キャンプフロイドに隣接していたフェアフィールドという名の小さな町は，7,000人の人口を擁するまでに発展した。多くの地元住民にとって，農作物やその他のものを販売できる市場が形成された。キャンプフロイドは最終的に1861年の夏に閉鎖されたが，このとき約400万ドル相当の余剰物資がわずかな金額で払い下げられた。政府は余剰の軍需物資の払い下げを行い，それによってユタの経済は大いに潤った。<sup>16</sup> 1861年7月27日にクック大佐は駐屯地の旗の掲揚に用いたポールをブリガム・ヤングに贈呈した。ヤング大管長はその旗竿をライオンハウスの東側の丘陵の斜面に立て，長年にわたって国旗を掲揚した。また政府軍の兵士の中には，末日聖徒の信じている教えを学び，教会に改宗した人々もいた。

1859年から1861年にかけて，教会の指導者は，世界の人々に喜びのメッセージを伝え，聖徒たちにシオンの集合を促すために，注意深く目立たないように宣教師の派遣を再開した。宣教師たちは再び，合衆国，カナダ，イギリス，西ヨーロッパで伝道を始めた。幌馬車と手車の両方による移住が，1859年にはゆっくりとした調子で再開され，そして1860年にはさらに勢いよく進められた。そしてヤング大管長は再び入植地開拓を推し進め始めようとしていた。しかし今回は，サンバーナディーノやフォートレムハイといった以前のような遠隔地入植策を再開したのではなく，山岳部の盆地において農業を基盤とした入植地を徐々に広げていくという方針を取った。1859年には30の新しい入植地が開かれ，1860年にはさらに16か所の入植地が築かれた。この傾向は1860年代を通して続いた。新しい入植地の多くはユタ北部とアイダホ南部のキャッシュ盆地，ベアレク盆地，そしてユタのワサッチ盆地，セ

## ユタ戦争

ピア盆地，サンピート盆地などに築かれた。

### 注

1. “History of Joseph Smith” *Deseret News* 「ジョセフ・スミスの歴史」『デゼレトニュース』1856年9月24日付，225
2. “Citizens of Utah” *Pioneer and Democrat* 「ユタの市民」『開拓者と民主党員』1858年1月1日付，2
3. 「ユタの市民」2参照
4. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻（Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930），4：242
5. ロバーツ『教会概史』4：150で引用
6. レオナード・J・アーリントン，*Brigham Young: American Moses* 『ブリガム・ヤング アメリカのモーセ』（New York: Alfred A. Knopf, 1985），255で引用
7. ジェームズ・パーシャル・テリー “Utah War Incidents” 「ユタ戦争に伴う小事件」*Voices from the Past: Diaries, Journals, and Autobiographies* 『過去からの声 日記，日誌，自伝』教育週間プログラム（Provo: Brigham Young University Press, 1980），66で引用
8. ロバーツ『教会概史』4：284で引用
9. ロバーツ『教会概史』4：314
10. ブリガム・ヤングからW・I・アップルビー長老あての手紙，1858年1月6日付，ブリガム・ヤング書簡控え帳，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー
11. E・セシル・マクガバン，*U.S. Soldiers Invade Utah* 『合衆国陸軍のユタ侵攻』（Boston: Meador Publishing Co., 1937），216で引用
12. ハルダ・コーデリア・サーストン・スミス “Sketch of the life of Jefferson Thurston” 「ジェファースン・サーストンの生涯」1921年7月，ユタの開拓者の娘たち博物館，ソルトレーク・シティー，17 - 18
13. ヒューバート・ハウ・バンクロフト，*History of Utah* 『ユタの歴史』（Salt Lake City: Bookcraft, 1964），535参照
14. バンクロフト『ユタの歴史』536で引用。武装保安隊とは治安維持のために組織されるグループ。通常は緊急非常事態のために組織される。
15. ジェームズ・M・メリル，*Spurs to Glory: The Story of the United States Cavalry* 『栄光への拍車 合衆国騎兵隊物語』（Chicago: Rand McNally and Co., 1966），102参照
16. ロバーツ『教会概史』4：540 - 541参照



